

ウィニフレッド・ワトソン作
最所篤子訳

ミス・ペティグールの素敵な一日

Miss Pettigrew Lives for a Day, by Winifred Watson, Translated by Atsuko Saisho

第四章 一二時五二分 一時一七分

ニツクの後ろでドアが閉まったとたん、緊張が解けました。それはまるで霧が晴れて澄みきった青空がのぞいたかのようでした。ミス・ペティグールは長いため息をつきました。足ががくがくしています。さっきの反動でした。疲れ果て、気が抜け、頭がどうにかなくなってしまったようでした。椅子を見つけて腰を下ろします。そして突然、わっと泣き出してしまいました。

ミス・ラフォースは閉じたドアを見つめながら立ちつくしていました。ニツクは行ってしまった。あの人を行かせてしまった。いったいどうしてそんなことしちゃったのかしら。なんて馬鹿だったの。行ってしまった今になって、こんなにニツクが恋しくなるなんて。ミス・ラフォースは今にも後を追いつくようになりました。ところが、ミス・ペティグールの涙にくるりと振り返ると、心配のあまり何もかも忘れてしまいました。

「泣かないで。ね、お願いだから」

さっきまでのとんでもない行いがミス・ペティグールの胸に蘇ってきました。嘘もついてしまったし、お酒も飲んでしまったし、下品なのしり言葉まで使ってしまったのです。

「生まれてから一度だって、悪態なんかついたことありませんでしたのに」そうめそめそと言いました。

「ほんと？」ミス・ラフォースが目丸くします。

「決して。心の中でだってございませんわ。司祭さまが心で悪態をつくのは、口に出して言うのと同じくらい悪いことだし、口に出さないだけでもっと卑怯だっておっしゃいましたわ。あの方はどっちもなさらない方なんですの」

「まあ、すごい！」ミス・ラフォースは恐れ入った声を出しました。

「ええ、そうなんです」

「でもあなた悪態なんてつかなかったわ」ミス・ラフォースが慰めます。

「きつと、かっかとなさってて、聞いてらっしゃらなかつたんですわ。あたくし『くそ』」

とか『犬に食わせる』とか申しましたわ。それに……言葉の通りのつもりで言ったんですの」

「なあんだ！」ミス・ラフォースは励ますように微笑みました。「それは悪態じゃないわよ。ただの言い回しよ。ね、言葉にも流行があるの。他のいろんなものと一緒よ。その二つはもう神様のバチがあたる言葉には入ってないと思うわ。さ、もう一杯、お飲みなさいよ」

そう言うと、お盆のところに行って、またシエリー酒のボトルから注ぎます。縁まで並々と注いだグラスを持って戻ってくると、

「さ、おあがりなさいな。シエリーぐらいなんてことないわ。朝は軽いのがいいんですよ」。

ミス・ペティグルーは顔を上げました。涙が乾きはじめています。その顔に何かに思い当たった表情が浮かび、驚きがゆっくりと広がっていきます。

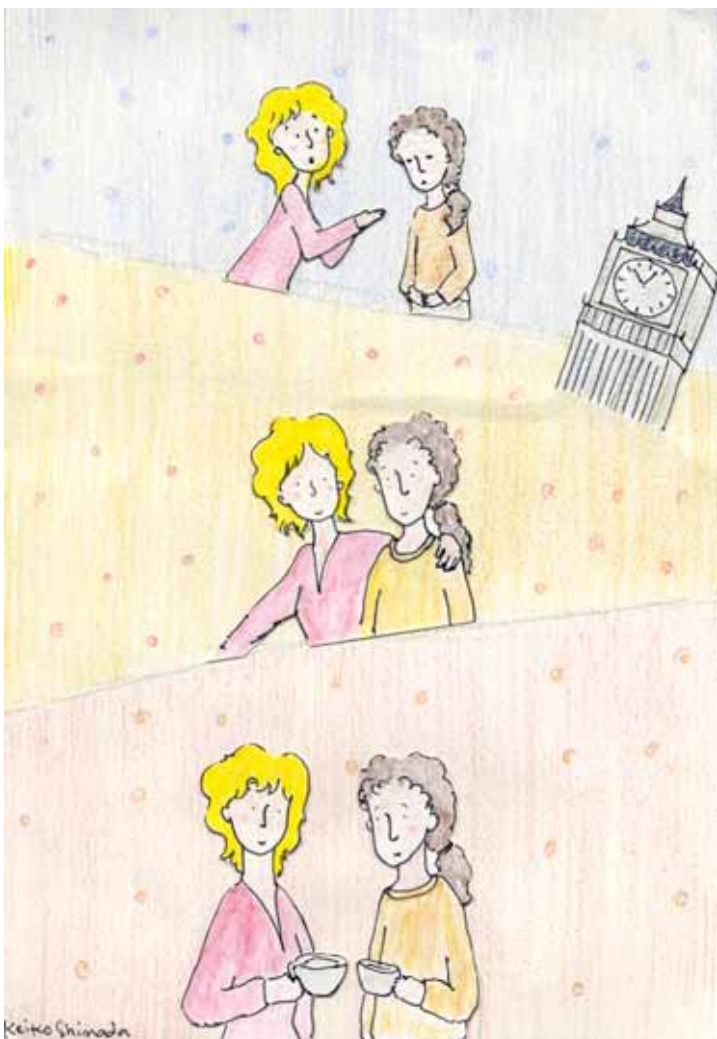
「ああ！」ミス・ペティグルーは息をのみました。「ああ、やったんだわ！ あたくし、うまく乗りきったんですね」

「たいしたものよ！」ミス・ラフォースが尊敬をこめて言いました。「素晴らしかった」ミス・ペティグルーの涙の浮かんだ目が輝きはじめました。わなわなとふるえ、まごついた、信じられないという顔をしています。

「やった、切り抜けたんだわ」

「ほら早く」とミス・ラフォースがせきたてます。「シエリーを飲みなさいよ。そしてどうやったのか教えて」

ミス・ペティグルーはお酒を断りました。



島田圭子画

「ありがとうございます、でも結構ですの。もう二杯いただきましたし、ちょっとばかり、飲むふりをしましたの。限度を心得ているのが賢い女というものですわ。これまでアルコールで愚かな真似をしたことはございませんし、いまさらはじめるつもりはありませんの」

「それじゃ、大丈夫なのね？」

「ええ」

ミス・ラフォースはシエリーを自分で飲むと腰をおろしました。

「ね、早く話して」とせがみます。「どつやっただの。もう待てないわ。ね、いったいどつやっただの？ あたし、キッチンのことをけろつと忘れてたの。キッチンのことなんて考えなかった。フィルのいた形跡なんか全然、探しもしなかったわ。あきれたほんやりよね。生まれつきなの。あなたは天才だわ」

ミス・ペティグルーはあわてて自分が天才でないことを説明しました。

「とつても簡単なことですよ」「熱心に言います。「ほんとつに簡単ですよ。なんでもないことなんです。あたくしが賢いなんてお思いにならないで。がっかりなさいますよ。寢室のお片づけをしてましたら、煙草の包みがありまして、一番安全なのはあたくしのハンドバッグの中だと思いましたの。ニックが怒って入ってきたときそれを思いだして、後はあの通り。ほんと、たいしたことじゃないですよ」

「たいしたことよ！」「ミス・ラフォースが言います。「たいしたことよ！ 素晴らしかったわ。信じられないくらい。何年も観たことがない名演技よ」

「とんでもない！ 演技なんかじゃございません。ただの真似なんですよ」

「真似？」

「あれはミセス・ブラムガンでしたの」

「ミセス・ブラムガンって？」

「前の雇い主です。いないところどころでこんなこと申し上げてなんですけど、まあひどい方でしたわ」

「あたしにはまだよく分からないんだけど」とミス・ラフォースはきよとんとしています。

「あたくしは二年間、ミセス・ブラムガンの下で我慢いたしました」とミス・ペティグルーは言いました。「ほかにしょうがありませんでしたの。おかげでこの人の性格にどんな効き目があるかよく観察することができました。それを一生懸命、真似したんですよ」

ミス・ラフォースはお馬鹿さんではありません。目を輝かせて言いました。

「まあ！」大きな声を出しました。「物真似ね。生まれつきの才能だわ。ほんとたいした芸だったわ！ そんな特技があるなんてちつとも知らなかった。あなた、すごい人ね」「そんな、とんでもない」「ミス・ペティグルーはそれを打ち消しましたが、子供のよう
に胸がわくわくし、嬉しくてたまりません。」

「プロになることを考えたことないの?」

「プロ?」

「舞台に立つのよ」

「舞台ですって!」ミス・ペティグルーはあえぎました。「あたくしが?」

「ほんとに上手な性格俳優はすごく不足しているのよ」ミス・ラフォースは意気込みます。「『じつじつ』とか分かるでしょ。若いうちに『デビュー』するとね、年齢が上がっていつて経験を積んでくると端役を演るのを嫌がるの。昔のファンに『昔は俺もあの女優も若かったなあ。あの頃の彼女を見せたかったよ、おい。』『キス・ミー、ダディ』の主役をやったときさ』なんて言われたくないのよ。そんなのぜったいだめなの。いつまでも若くて、若い主役でいたい。それが無理になつたら舞台を去るの。でもそついう人たちを責められないわ。あたしもそつするもの」

「あなた、舞台にお立ちなんですか?」と尋ねると、ミス・ペティグルーは自分のお芝居の才能の話からたくみに話題をそらしました。

「ええ」と、ミス・ラフォース。「でも、今はちよつとお休みしているの。休んでる間もちよつとは働いてるけど。フィルが『パイル・オン・ザ・ペッパー』にあたしを抜擢する準備をしている間、それより小さな役にサインしなくなつたのよ。だから小さい契約は断つて、今の契約は『深紅の孔雀』だけ」

「ずいぶんと奇妙な名前ですこと」ミス・ペティグルーはつぶやきました。「深紅の孔雀なんて」

「そうね。でもすぐくぐつとくる名前じゃない? ニックがティ・シヨルツといつしよにやっているの。ニックはちよつと昔風なところがあつて、『深紅の女』っていう名前にしたかつたの。ティのほうは想像力がなくて『緑の孔雀』がいいって言つて。それでトランプのカードを引いて決めようとしたの。ところがね、あの人たち、自分のトランプがチャーリー・ハードブライトのいかさまトランプだつてことを知らなくて、二人ともスピードのエースをひいちゃつたのよ。どっちも譲らないし、もう一回カードをひくのも嫌だつて言つて、それぞれ足して二で割つて、『深紅の孔雀』ってことにしたのよ」

「まあ、なんて面白いんでしょう」ミス・ペティグルーはため息をつきました。「つまり、ものごとの内側の歴史を知ることがですわ。あたくしこれまでいつも外側におりましたから」

「そうね。ニックがいたときはまさに内側にいたわ」

ニックのことが話題にのぼつたおかげで、また彼のこと心が迫ってきました。ミス・ラフォースは立ち上がると、頭を半分だけこちらに向けて、マントルピースの上の飾りをいじりはじめました。楽しい笑顔が曇り、ちよつと悲しそうに見えます。

「どんだか分かつたでしょう」くぐもつた声で言いました。「あの人から……逃げられないの」

「ええ」

「ときどきああいう男がいるのよ」

「確かに」

「説明がつかないの」

「ニックみたいじゃない男性にはね」

「言葉では言い表せないわ」

「あたくしは女ですから」とミス・ペティグルーは言いました。「言葉はいりませんわ」
ミス・ラフォースはマントルピースに肘を寄せ、額に掌を当てました。その声は少しく途方に暮れているようでした。

「ニックは悪い男だって分かっているの。あの人と別れたい。彼が留守にしたこの三週間、帰ってきたら全部、終わりにしようって決心していたの。あなたに応援してくれるようにお願いまでしたわ。でも見たでしょう。あの人が帰ってきたとたん、またぐらつとなつてしまった。あなたがいなくなったら今晚のことも、ニックが言うことをなんでもきいちゃったでしょう。でも次のときにはあなたはいないかもしれないんだわ」

ミス・ペティグルーは、これは断固とした態度で臨まなくちゃだめだということが分かりました。だんだん自分の新しい役割が見えてきて、問題に果敢に取り組む意欲がわいてきたのです。

「お座りなさい」とミス・ペティグルーは言いました。「考えてみたら、なぜあんなことしたんでしょうね、あたくし。ほんとに自然にそうなつてしまったんですの。何も考えてませんでした。あの方は、とても……とても威圧的な性格の持ち主ですわ。怖かったです。あたくしも怖かったです。何とかしないわけにいきませんでしたから、なんとかしたんですよ。でも、あたくし大馬鹿でしたわ。ほんとにニックにフィルさんのことを気づかせたほうがよかったです。それでフィルさんは怒つたニックにひどい目に合わされるかもしれませんが、あなたがたの間は無事に終わりになったでしょう。いつたいなんでそのチャンスをつぶしちゃったのかしら」

「でも、そうしてくれてほんとによかつたわ」ミス・ラフォースが声を出しました。

「お座りなさい」

ミス・ラフォースは座りました。

「あなたはお小言が必要ですよ」とミス・ペティグルー。

「そんな気がしてたわ」

「お気になさらなければ」とミス・ペティグルー。「あたくしがお小言を申し上げますわ」

「気になんてしないわ」とミス・ラフォース。「お小言を頂戴するわ」

「あなたはご自分を可哀想がつてらっしゃいます」厳しく指摘します。「愛するべきじゃない人を愛するような運命に陥るなんてひどすぎると思つてらっしゃる。そんなのフエアじゃないし、心配事が多すぎて気分も落ち込むし、だからご自分を憐れんでいるん

ですわ」

「そうかもしれないわ」ミス・ラフォースは正直に答えました。

「あたくしはこれまで、ずいぶんと嫌な目にばかりあつてまいりました。そんなことがあなたの身に起こらないようにと願いますわ。でも、きつと起こらないだろうと思いません。だってあなたはあたくしみたいにびくびくしておられませんか。ただね、一つだけ絶対にしてはいけないことがあります。自分を憐れむこと。それがいろんなことをもつと悪くしてしまうんですよ」

「その通りかもね」

「その通りなんですよ。事実をそのまま受け入れなくちゃだめ。あたくしはそうしてきました。あたくしの場合には」ミス・ペティグールは簡単に言いました。「ひたすら耐えることでしたわ。それだけしかやりようがなかったから。戦う勇気がございませんでしたの。いつも人が怖くてしかたなくて」

ミス・ラフォースは信じられないという目を向けました。

「本当ですわ」とミス・ペティグールは続けました。「今日のごとで判断なさらないでくださいな。あんなふつな振る舞いをしたのは生まれてはじめてなんですのよ」

「あたしはひたすら耐えるなんて無理だわ」

「もちろんです」とミス・ペティグール。「それでいいんですわ。あなたはきつと反撃して、いつかみんなうまく収まるでしょう。あなたには勇気がありますもの。あたくしはそうじゃありませんけど」

「そう思つてくれて嬉しいわ」

「勇気のことはお分かりね」とミス・ペティグールは厳しい口調で言います。「今度はそれを使う番ですわ」

「あら」

「ニックは行つてしまいましたわね」とミス・ペティグール。

「ええ」

「彼がそのドアから出て行ったとき、世界が終わつてしまつような気がなされたですよ」

「そうそう、そうなのよ」

「今もそのときとまったく同じ気分がします？」ミス・ペティグールが問いただします。

「そうね。いいえ、今はそうじゃないわ。そんなにひどくはない。考えてみたら、さつきとは違つわ」

「ニックはいない。でもいなくても耐えられる」

「ええ、そうだわ」

「明日は一〇年待たなきゃ来ないつていつわけじゃありませんわね？」

「もちろんよ。一〇年先なんかじゃないわ。あたし、待てるわ」

「ほら、これでお分かりでしょ」と熱心に続けます。「ニックがいるときだけが問題な

んですよ。そこにいなければ、ニックなしだって生きていけるんです。このことをお忘れにならないで。そのときがどんなに辛くても、ニックが何を頼んできても、お返事は後ですとだけ言って、彼が帰ってから一五分待ってから決心なさってください。あの人の魅力が薄れてしまっただけからね。約束してくださいさる？」

「難しい約束だわ」とミス・ラフォース。「でも、約束する。自分のためですもの。今日のこと、なんてお礼をしたらいいのかわからないわ。二度も助けてくださったんですもの。あたし、一度もニックにダメって言ったことないのよ。どんなにそうしたくても、本当にできるなんて思っただけでなかった。でもやってみたら、ね、わかる？ 今、けっこう平気なの。気分がいいのよ。一度できたんだから、次もできないはずないって気がする……次もできる気がする……なんだか」とミス・ラフォースはだんだん朗らかになってきました。「すごくいい気分。自由になった気がする。たぶん、ニックにノーって言うわ」

「そうですね」とミス・ペティグルー。「その意気よ」

そう言って椅子の背によりかかります。ミス・ラフォースも背中を椅子に預けて、物思いに沈みました。マントルピースの上の置時計がちくと鳴っています。その音がだんだんとミス・ペティグルーの頭の中に響いてきました。頭をめぐらせて時計を眺めます。時計の針はあつという間に動いていて、ミス・ペティグルーは自分がどこにいるかを思い出しました。もうここにいる理由は何もありません。礼儀にしたがつて失礼するべきでしょう。用向きを言って、それから帰るのです。いつまでもミス・ラフォースの味方、という同等な立場ではいられません。働き口に応募してきただけの分際に戻るのです。でもその仕事は、決して手に入らないでしょう。ミス・ペティグルーは直感していました。

ミス・ラフォースのプライベートのごたごたを知りすぎてしまったのです。ミス・ペティグルーはこれまで人間の難しい性質にずいぶん悩まされてきましたから、女主人にとってこういう状況が耐え難いことをよく知っています。絶望と不幸の苦い味がこみあげてくるのを感じます。でも、ミス・ペティグルーにできることはなにもありません。さあ、今度こそここにいる理由を説明して、この素晴らしい冒険にピリオドを打たなければ。

でもそんなことしたくありませんでした。生まれてこのかた、これほどどこかにいたいと思ったことはありません。ときどき大騒ぎが持ち上がるとはいえ、この樂しげで氣樂な雰圍氣に背を向けるなんて耐えられそうもありません。ここには彼女に優しくしてくれ、彼女を素晴らしと思うってくれる人がいるのです。フィルに何が起きるのか、ニックの魅力はミス・ラフォースの頼りない抵抗を押さえつけてしまうのか、そしてマイケルというのが何者で、どんな男なのか、ぜんぜん知らないまま、このまま生きていくなんて。孤独と疎外感に目がじんとききます。

「待っていよう」とミス・ペティグルーはのろのろと考えました。「あと三分だけ。時

計の針があと三分だけ動いたら、お話ししよう。あと三分だけ幸せな気分であつていいはずだわ」

どうか、どうかドアをノックする音がしますように。ミス・ペティグルーは必死で祈りました。ミス・ラフォースの家のドアを叩く音はすなわち冒険の予兆なのです。ここは普通の家ではありません。普通の家ならドアを叩くのは肉屋やパン屋や蠟燭立て売りの御用聞きだったりするでしょう。でもミス・ラフォースのドアに響くノックは、興奮と、ドラマと、解決しなければならぬ新たな危機の到来を知らせるのです。ああ、一度だけでけつこうですから、神様、どうか奇跡を起こしてあたくしをここにいさせてくださいまし。一日だけ、こんな人生もあるんだって見せてくださったら、残りの人生が退屈でつまらなくて、悪くなる一方でも、このあたくし、ミス・ペティグルーにも完璧な一日があつたんだと、心に思い返しなが生きていくことができますわ。

でも奇跡は起こりません。ドアを叩く音はしませんでした。時計はちくちくと進んでいきます。三分は過ぎてしまいました。いつだって、自分自身にさえ嘘をついたことのないミス・ペティグルーは座りなおしました。両手をしっかりと握り締めます。その顔は心を決めた、悲しいあきらめの表情が浮かんでいます。

「たいしたことではございませんけど」とミス・ペティグルーは勇敢に口を切りました。「お話をしておいたほうがいと存じますわ。あたくしの……」

ミス・ラフォースは夢から覚め、ため息をつくときわ笑いかけました。

「あたし、マイケルのことを考えてたの」と告白します。

「マイケルですって！」ミス・ペティグルーは大声を出しました。

ミス・ラフォースはちよつと恥ずかしそうにつなずきます。

「誰かってことは関係ないんだけど」と身を乗り出して言いました。「女って自分に結婚を申し込んでくれた男になんとなく感傷的になるものですよ。その男と結婚するつもりなんて全然なくって、最低なやつだと思っている相手でもね。それが誰だろうが、どんな男だろうが関係ないの。プロポーズしてきた男って別格になるんだと思うわ」その顔は考え深げに見えました。「だって、それこそ最大の褒め言葉じゃない。自尊心をくすぐられるわ」

ミス・ペティグルーはマイケルなんか嫌いでした。ミス・ラフォースには結婚してもらいたいと思っています。結婚こそ最良の筈です。でも、どういふわけかそれは当たり前前の結婚ではだめでした。ミス・ラフォースには平凡な結婚なんかしてほしくありません。ハッピーで、ロマンチックで、輝かしいものでなくては。たとえそれで生活が保証されるとしても、ミス・ラフォースがたいくつで野暮な当たり前の男と地味に落ち着いてしまうことを考えると、なぜか心が痛みます。そしてマイケルときたらまさにこの通りの人間のようにありませんか。

「もしかして」とミス・ペティグルーは期待するように尋ねました。「マイケルさんは准男爵かなにか、貴族の家系ではありませんの？」

「とんでもない」とミス・ラフォース。「あのマイケルが？ 全然ちがうわ」

「だと思いましたわ」ミス・ペティグルーはしょぼりしました。

「彼のお父さんはバーミンガムの魚屋さんよ」とミス・ラフォースは説明します。「で、お母さんは仕立て屋なの。でも彼は一六才でこっちに出てきたのよ。よくいう、叩き上げの人の」

「なるほど」とミス・ペティグルーはがっかりして言いました。

そんなやつ最低です。こつこつ叩き上げの男というのとはかく頭が固くて心が狭くてどうしようもないことをよく知っています。たとえばフルブリー紹介所から行ったサップフィッシュ氏。つくづくくだらない男でした。立派な家の出でもないし、なんの後盾もありません。新しく手に入れた地位に汲々としてしがみつき、ちゃんとした足場がないものだからいつ階段から転げ落ちるかと心配ばかりしています。戦々恐々として他の誰かなら有頂天になるような人生を楽しむどころではありません。心理学を勉強したミス・ペティグルーにはその押しひしぐような抑圧の心理が分かっていました。さあ賞品は手にした。ではその次は？ 人々のささやきとつわさへの怯えだけです。（そうそう、あの人の奥様……朝から晩まで一挙一動をじろじろ用心深く見張られて。お気の毒に！ あんなことされたらミス・ラフォースは駄目になってしまつわ。きっとマイケルはミス・ラフォースの翼を折ってしまいますよ）

（マイケルはだめ！）ミス・ペティグルーは祈りました。（別の誰かじゃなくつちゃ）「ほかにどなたかプロポーズなさった方はいらっしやいませんか？」期待をこめて聞きます。

ミス・ラフォースは顔を輝かせました。なんだか話が面白くなってきました。

「そうね、ディックがいるわ」といそいそと言います。「でも一文無しでやぶにらみな。彼、新聞記者なんだけど、記者っていつも貧乏よね」

「却下」とミス・ペティグルーは厳しく言い渡しました。

「それからウィルフレッドね。でももうデ이지ー・ラルーとの間に二人も子供がいるから、彼女と結婚しなきゃだめじゃないかしら」

「もちろんです」と言ったミス・ペティグルーはショックを受けましたが、よこしまな好奇心がわいてきます。

「あたしをあきらめたら、結婚すると思つわ。ジョアンとジョージのこととっても可愛がつているもの」

「かわいそうな子供たち！」と胸をわくわくさせながらミス・ペティグルーは言いました。

「だからウィルフレッドもボツね」とミス・ラフォースは鷹揚に言いました。

「他にはどなたもいらっしやらないの？」とミス・ペティグルーがっかりして尋ねると、

「そうね。いないと思つわ。今のところはね。つまりね、今はあんまり何かに真剣にな

ってないのよ、あたし」

「とにかく」とミス・ペティグルーはしゅしゅといいました。「まだあたくしマイケルさんにお目にかかってませんし……」

ふと、ミス・ラフォースの目が時計に留まりました。

「まあたいへん！」と息をのみます。「時間を見て。一時一五分よ。お腹すいたでしょう」

あわててミス・ペティグルーのほうを向くと、「お願い！　ね、いてくださるでしょう。他にお約束あたりしないでしょ、ね？　一人でお昼を食べる気がしないのよ」

ミス・ペティグルーは背もたれに寄りかかりました。あまりの喜びに頭がくらくらします。

「いえいえ」そう言ったミス・ペティグルーの言葉は、もし目に見えていたらきらきらと輝いていたでしょう。「ほかのお約束なんてごさいませんわ。一緒にお昼を頂きましたわ。あたくし一日中、何も用事はごさいませんの」